

## 編集後記

### 編集長(ダン シロウ)

●79歳になりました。残りの時間についての自覚があります。「心残りのないよう、やりたいことをしておく」という慣用句も浮かんできます。でもそれは、やりたいのにやらないで来たことが多い人の話かとも思いますが。私の今は、「出来ることをしておこう」です。

マガジン編集長などもそうですが、これまで続けてきたことで、意味があると思えることを続けよう。そしてお世話になったこの世界に、小さくても良いので、置き土産をもう一つ、そんな気持ちです。

●マガジンの中に AI に関わることがちらほら登場しています。時代の反映ですね。私も初歩的な使い方をなぞって楽しんでいます。

指示だけで、様々なタッチの絵を描いてくれるなんて魔法です。質問をすれば何だって答えてくれますから、聞きたくなるのも当然でしょう。

でもそんな凄いことがいったいどうなっているのかなんて、皆目、解ろうとはしていません。こんなことはこれまでの人生に何度もあったので平気です。「ちゃんと解っておかないと…」なんてのは常套句、定番。そんなことを言ってる間にたいしては、もっと新たなものが登場して、そのうちこちらの寿命が尽きて、お後がよろしいようで、ということになるのでしょう。

●齋藤清二さんが逝去されました。ご冥福をお祈りします。マガジンには No.21～No.36 まで、「**ああ、萌の構造 序論**」のタイトルで連載していただいていた。ぜひバックナンバーをご覧ください。

齋藤さんとは立命館大学大学院の家族クラスター担当教員として毎週ご一緒する期間が長くありました。私の退職後、ご病気で倒れられて、お目にかかる機会を失ったままでした。

私より四歳下、1951年生まれ。学びたい人に教えるのが好きな方でした。連載の最終2019年第36号の執筆者短信にこう書いておられます。

「早いもので、今年度も終わりに近づき、暖かくなって

きたと思ったら、あっという間に花粉に悩まされる季節となりました。「花粉を飛ばしている杉の木にしか使わないと約束するから、巨神兵を貸してくれ、頼む！」と叫びたくなるような季節です(笑)。

ところで、ようやく登録が終わり、晴れて公認心理師を名乗ることができるようになりました。これが最後の国家資格取得となると思いますが、少しでも後進の教育の役にたてればと思っています。齋藤清二」

●今号からの新連載、八木慎一さんは農福連携事業所の支援員として。シルバーマン恵子さんは、非暴力コミュニケーションについて。ご覧下さい。

### 編集員(チバ アキオ)

『近代京都の〈被差別空間〉部落・在日・遊廓と経済的差別』(著:瀧本哲哉)を読んでいる。女子大学で女子教育に初めて関わることになった。自分がある女子学園が設立した当時の女性が置かれた社会的立場をさらに知ることになった。よくある「そうだ京都に行こう」と言って、女性が男性と同じくらい来るようになったのは、1970年代以降。それまでは性産業が盛んで、一般娯楽と並列で男たちが通っていた。当時の男性人口と利用客数をみても相当な回数で、京都は特に人口比にしても、その割合が高い都市というのが顕著。京都には女子教育を行ってきた教育機関が多い。こうした状況への改善に向けたチャレンジである。当時こうした産業が市内の各所、府内の各地にあり、女性の働き先が限られていた状況も背景にあった。今まで女子教育の成り立ちやその必要性について知る機会があった。しかし、廃娯運動をはじめこうした側面を詳細に知る機会にはなかった。繊細な話題であり、深く広い理解が必要となると次世代への伝達も避けられてきたのではないかな。こうした編集は良かったのだろうか。当時の社会背景を知ることが出来る。他国では現在も似た状況がある可能性、見えない形に移行した可能性もあるし、また時代が戻る可能性もゼロではない。『魔女・産婆・看護婦:女性医療家の歴史』(バーバラ・エーレンライク, デイアドリー・イングリッシュ他)にもあるように男女の争いは有史以来続いてきた。難しいからと編集の結果、削除されてはいないか。マガジンは、編集の結果削

除されかねないコンテンツも含まれていると感じている。そこが心強いし、編集のやりがいである。

## 編集員(オオタニ タカシ)

編集長がとにかく元気で楽しそうです。周りを振り回すようなパワフルさではなく、「ごはんがおいしい！」という健やかな元気さと、日常が好奇心と創造性に満ちた楽しさであふれていました。

これまで楽しく元気な編集長について「まあ、編集長はクリエイターだから…」という程度の認識で済ませてしまっていました。しかし、よくよく話を聞いているうちに、これは単に性格とかいう種類のものではなく、“そうなるように行動している”結果であると気づきました。以前、編集長から「セレンディピティ」という言葉を教えてもらったのですが、楽しさのセレンディピティというものもあるんですね。楽しく健やかな 50 代、60 代を迎えるための知恵と示唆に満ちた編集会議でした。

(コレじゃ、編集後記と言うより、編集長記だ) 編集長

## 対人援助学マガジン

通巻65号

第17巻 第1号

2026年6月15日発行

<http://humanservices.jp/>

## ■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

マガジン編集部

第66号は2026年09月15日

発刊の予定です。

原稿締切**2026年08月25日!**

**執筆希望者、常に募集**

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。**執筆資格は学会員であること。** 現在非会員で書いていただく事になった方は、**対人援助学会への入会手続き**を以下でお願いします。

## 対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

## 表紙の言葉

この絵は第293話『深夜』の一コマ。子育てまっただ中、働き盛りの夫という、昭和っぽい生活の一コマ。

そこで彼らは、どう役割をこなしていこうとしたかを、編集員の千葉君の実体験として聞いた話を元に描いた作品。

家事や育児の負担平等化とは違った形で、4人の子育て期を乗り越えていく夫婦の話に、心動かされるところがあった。

2026/6/15